# あなたの虜

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたの虜

【Ｎコード】
Ｎ８８９３Ｚ

【作者名】
流星群

【あらすじ】
借金取りから窮地を救ってくれた金髪碧眼男は異世界の王子様でした。このまま異世界に拉致られてはたまりません。堅実をモットーとする小鞠は王子様を異世界に追い返すことができるのか。
ムーンからのお引越しです。

## 1（前書き）

お引越しをご理解くださった皆様。
本当にありがとうございます。

# 1

そんなことはテレビドラマの中だけだと思っていた。
だけど現実らしい。

「佐原小鞠さん。死んだ母親の残した借金１０００万、きみが払ってくれるんだよねぇ？」
一昔前のチンピラ風な風貌ではなく眼鏡にスーツ。
インテリ青年実業家みたい、と小鞠は男を見てそんなことを思う。
だけど口調がなってない。
死んだ、ではなくそこは亡くなったというべきだ。
払ってくれるんだよねぇ、ではなく、払っていただけますよね、とかなんとか言うと良かった。
これでは外見だけ繕ったおバカさんに見える。

「なんでわたしが払わなきゃいけないんですか？男と蒸発した母とはもう2年も会ってませんし、死んだのだってもう一ヶ月も前でお葬式も何もかもすんじゃったんですよ。来るならもっと早く来るもんじゃないですか、借金取りって。はっきり言って胡散臭いことこの上ないんですけど本当に母が借金してたんですか？」

築２５年のマンションのリビングに一見インテリだが、あっち系のやばい人と対峙している。
なのにやばい人相手にどうしてこんなことが言えたのか小鞠にも不思議だった。
突然ふってわいた借金話に頭がついていってないんだ、きっと。
男の舎弟、もとい部下らしきチンピラ、もとい平社員が生意気な態度に気色ばんだが彼女は怯むこともない。

「へぇ、なかなかに肝の据わった姉ちゃ――娘さんだ」
うっかりボロが出てるぞと小鞠は内心突っ込む。
誰が姉ちゃんだ。
ここは飲み屋じゃないっての。
どこのオッサンよ、と胸中で悪態をついていると、男はスーツから一枚の紙を取り出して小鞠に見せた。
紙には「借用書」とある。
内容を目で追っていた彼女は最後の連帯保証人に自分の名前があったことで目を見開いた。

「はぁ！？なんでここにわたしの名前があるのよっ。って言うかこれわたしの字――」
「おや、自分で書いたって認めたね。綺麗な字だ。書道でも習ってたかい？」
小鞠は借用書の日付を確認し、それが2年前の母が蒸発する前の日だとわかって、閃くように思い出した。

『小鞠ちゃん、ここに署名してほしいんだけどいい？お客さんに増税反対の署名運動に名前書いてって頼まれたのぉ。ね、お・ね・が・い』

父が病気で亡くなってから生命保険を食いつぶして生活していたが、いつかは尽きるとわかっていた。
そのため専業主婦だったはずの母親は水商売に飛び込んだのだ。
一番手っ取り早く金が稼げると。
元来寂しがり屋の母はそこでいろんな男に入れあげ、そして最終的には男と蒸発してしまった。
それが小鞠の２０歳の時だ。

もう成人したから一人でも平気だと思ったのだろうか。

それから2年音信不通で、やっと連絡が来たと思ったら警察からだった。

雨の日にトラックと正面衝突して同乗していた男と一緒に死んだらしい。

母の亡骸を見ても涙も出なかった。

ただ死んだのかと他人事のように思っていた。

自分の娘を見捨てて男と楽しく暮らしていた人に同情もない。

そして怒りも憎しみももうない。

――はずだったが、小鞠はたったいま思い出した過去にメラっと怒りが湧き上がるのを感じた。

（あれかぁ！やけに分厚い署名用紙だと思ってたけど二重になってたんだっ）

2枚綴りの伝票や書類ように1枚目に署名すれば、残りの2枚目にも文字がうつるようになっていたのだろう。

1枚目はちゃんと増税反対の署名用紙だったため油断した。

くっそう手の込んだことをと歯軋りしたい思いで、小鞠は男の持つ借用書を奪い取ろうと試みた。

けれど男がひょいとそれを持ち上げ懐にしまう。

「さて、署名がきみのものだと判明した以上、金は払ってもらわないといけないねぇ」

「お金なんてないわよっ」

「大学4回生のきみは奨学金をもらってる苦学生ではないようだけど？それにこんな広いマンションに一人暮らしだ。いいご身分だねぇ」

「返済義務のない奨学金を狙ったけど駄目だったの。奨学金って言う借金を背負うより父の残り少ない保険金で大学に行くことにしただけよ。このマンションだって父が遺してくれたものよ。母が亡くなって相続税とかかかったしおかげでもうすっからかん。来年から社会人だしその給料で生活費やここの管理費なんかをなんとかまかなえるかなって思ってるところなの。まさかここを売れとか言う？たぶん二束三文で１０００万なんて大金に替わることはないと思うけど」

「ま、でも借金の足しにはなる。猶予は１０日あげようか。すぐ引っ越してもらおう」

決定事項かと小鞠が相手を睨みつけたところでいきなり第三者の声が割って入った。

「借金？わたしの后となる女性がそのような苦しい立場にあったとは。その借金はすぐにわたしが支払おう」

リビングのドアを開けて廊下から現れたのは金髪碧眼の男だった。

その後に茶髪の男が二人続く。

あんぐりと口を開けたのは小鞠だけではない。

目の前の男と舎弟も同じだった。

見た目がばりばり外国人の男が流暢な日本語を話しているのは全くもって違和感がある。

いや、それ以上に違和感があるのは彼らの服だ。

特に金髪碧眼男。

それはなんのコスプレですかといいたくなるような、きらっきらの衣装を着ている。

たとえるならそう、あれだ。
マリーアントワネットなどが出てくる映画の衣装。
靴がブーツであったり剣を携えていたりするし、デザインに少しファンタジー要素も加わっているようだが、中世とか近世の貴族様と表現するにぴったりだ。
誰、と言いかけた小鞠だったがはたと気がついた。

（え？ブーツ？ってこの人たち土足）

金髪碧眼の男が小鞠に向かって微笑んだ。
笑顔もキラキラだなぁ、とどうでもいいことを思いながら、彼女は室内に響く男の艶やかな声をまた聞いた。

「で、姫。１０００万とはいかほどのことですか？あいにく持ち合わせはそうありません――おい、そこの無礼者。これで１０００万とやらに足りるのか？」
金髪男が背後に控える深緑の目をした男に目配せをすると、付き人のようにしたがっていた男は懐から包みを取り出し広げた。
そこには金貨がたんまり入っている。

「ちょ、あんちゃん。その妙な服装といいこの金貨といい。どこの仮装パーティの帰りだい？こんな偽物の金貨で俺たちが納得するわけ――」
「誰が偽物など渡すか。カッレラ王国第１３代次期国王シモン・エルヴァスティを愚弄するか、この悪党どもが。我が国の金貨は他国のように混ぜ物などせず純金でできている。ゆえに世界でも我が国の金貨は価値が高いのだ」

へぇ王子様。
まさに型にはめたようだと小鞠は男を観察した。

## 2

濃い金色の髪はそこにある金貨のごとく色で光を受けるとピカピカ。
青い目はサファイアですかと言いたくなるくらいの綺麗な深い青をしている。
キリとした眉は男らしく、鼻筋は通って唇は厚くもなく薄くもなく形がいい。

（もうこれ、どこのスター様ですかってくらいかっこいいんですけどぉ）

後ろの二人もそれぞれ整った顔立ちで、いつからここはハリウッドスターが訪れる家になりましたと自問する。
いやハリウッドスターに知り合いはいないし、そもそも英会話もできないからね。
などと余計なことを考えて現実逃避してしまうのは小鞠の悪い癖だ。

「これではまだ足りないか。ではこれもつけよう。鞘を飾る宝石は本物だ。実践用なので装飾は最小限だが質のいい宝石を使ってある。テディ、オロフ。おまえたちも剣を渡せ」
「シモン様、丸腰ではシモン様をお守りすることができません」
「良い、オロフ。姫の憂いを払うことが最優先だ」
テーブルの金貨の横に男たちが剣を並べる。
シモンと呼ばれた王子の剣が一番高価そうだ。
実践用というわりに鞘にはめ込まれた宝石はかなり大きい。
他の二人の剣はそれに比べると宝石もはめ込まれているわけでなく、かなり見劣りするが使い込まれた感はあった。

小鞠が目の前のチンピラ男と舎弟を見つめると呆然としている。

自分もこんな顔してるんだろうなぁとぼんやり思う。
だがそんな男二人に痺れを切らしたのかシモンと言われた王子様は、なんちゃってインテリ風眼鏡男の座るソファをブーツでぐりぐりと踏みつけた。
えっと、それうちのソファなんですが。

「１０００万とやらにはこれで充分だろう。さっさと換金所にでも行ってこの世界の通貨に替えてくるが良い」
言って男のスーツから借用書を取るとビリリと盛大に破いてくれた。
ブラボー、シモン様。
これで晴れて自由の身と小鞠は内心ガッツポーズを取る。

「まだ居座るつもりなら交渉は決裂、この場で斬って捨てるがどうだ？」
美形が凄むと恐ろしいのだなと小鞠はこのとき初めて知った。
やばい人たちは自分たちよりやばい人の出現に泡を食って早々に退散してくれた。
もちろん金貨と剣は持っていくのだからちゃっかり、もといしっかり仕事をしている。

「姫、お初にお目にかかります。わたしはカッレラ王国第１３代次期国王シモン・エルヴァスティと申します」
王子様は何事もなかったように笑顔を浮かべ礼儀正しく自己紹介した。
ついでに従者二人も紹介してくれた。
茶髪で緑の瞳をしたのがテディ・ユーセラ。
そして同じ茶色でも少し濃い髪色をして、ヘーゼルナッツ色の瞳をしたのがオロフ・ヒルヴィ。

テディはシモン王子の側近で仕事の補佐なんかもするらしい。
オロフは近衛騎士団の団員ということだった。

「座っても」とさっきまでチンピラが座っていたソファを指され、小鞠が頷くと彼はゆったりと腰を降ろす。
うわぁ、足長いなぁ。
そんな彼の後ろに従者二人が控えて立った。
ＳＰだ。ＳＰがここにいる。
これもうどっきりですとか言われたほうが納得するんですけど。

「名前はさっきも伺いました。ただわたし、カッレラ王国なんて知らないんですが。国はどこにあるのですか？金髪碧眼なんて北欧とかあっちの人？」
「いえ異世界ですよ、姫」
なんだかさっきから普通に「姫」とか言われてるけどやめてくれないかなぁ。
ガラじゃないし。
それにしても異世界なんて場所どこにあったっけ。
つらつら考えていた小鞠は「ん」と思考が停止した。

「異世界ってことは違う世界ってことですか？アニメやラノベでよくある魔法や剣やドラゴンが出てきて、こっちの世界の人が召喚されて魔王やら悪魔を倒せとか、理不尽に迫ってくるっていう」
「アニメやラノベ……はわかりませんが、ドラゴンはもう絶滅しましたし魔王や悪魔はおりません。魔法使いは城におりますよ。姫が会いたいのであれば城に戻ったらすぐに場を設けましょう」
「場を設けるってわたしやっぱり異世界に拉致られるんですか」
「拉致だなんてとんでもない。あなたはわたしの后となるべく方です。丁重にお迎えする所存です」

またしても小鞠の思考がとまる。
「后」と聞こえましたが気のせいですか。
そういやさっきも聞こえたな。
いやいや、聞き間違えたかもしれないじゃないかと小鞠は質問する。

「后って、あなたの世界では異世界から花嫁を拉致るんですか？」
「いいえ、このようなケースは稀です。姫はご存知ではありませんか。生涯の伴侶を魂の片割れと言ったりするでしょう」
「えーっと運命の赤い糸とか自分の半身とかそういう？」
愛至上主義みたいな人が喜びそうな話だ。
小鞠はそれほど恋愛体質ではないためよくわからないが、そこまで一人の人を想えるのはすごいと単純に思う。
シモンは小鞠の言葉に頷く。

「カッレラ王国の王族は代々その魂の片割れを見つける能力に長けているのです。そしてわたしの相手が姫、あなたです」
「いやあなたって言われてもそんな直感で相手を選ぶような話を、はいそうですかって信じるわけ――」
「直感ではありません。愛魂が片割れを呼ぶのです」
「アイコン？」
パソコンのアイコンとは違いますよね、という質問はなんとか飲み込んだ。

「魂魄の愛を司る部分です。誰もが持っていますがわたしたち王族はこれを取り出すことができます。ほらこのように」
シモンが胸に手を当てゆっくりと離すと、そこに日の光を反射する水面のような輝きが現れた。
ゆらゆらと彼の掌で青く揺らめくのが綺麗だ。
その光が形を崩して小鞠に向かって流れていきそうになったところで、シモンは手を振ってその輝きを消した。

「愛魂の導きであなたを見つけました。姫、どうかわたしの后になってください」
「いや、無理です」
すげなく即答する小鞠にシモンより背後に控えた従者の方が驚きの表情になった。
「平民がシモン様の求愛を断った？」
「次期王妃ともなればこのような質素な部屋で暮らさずとも贅沢三昧だというのに」

こら、聞こえてるから従者君たち。
質素で悪かったな。
あんたたちの言う平民はこれが普通なの。
っていうか今の時代、家賃の要らない家があるだけいい方なんだから。
ムっと小鞠は表情を険しくすると、そんな彼女の様子に気づいたらしいシモンが従者へ鋭い一瞥をくれた。

「姫を愚弄するか？おまえたちといえど容赦はしないが？」
シモンの言葉に二人は控えるように口を噤む。
「失礼しました、姫。いろいろ質問はあるのですがまず最初に、あなたの名前を教えていただけますか？」

「小鞠……佐原小鞠です。質問ってあなたの求愛を断る理由でしょう？そんなの決まってます。異世界なんて行きたくありません。わたしは堅実をモットーに生きてるんです。父が亡くなってホステスになった母は、男をとっかえひっかえにするただれた生活を送ってました。それを見て育ったからか安定を好むようになりまして、えー、ですからはっきり言って異世界なんてわけのわからないところ無理です。堅実や安定からかけ離れていますし、人間これまで生き

てきた階級で生きるのがいいんです。そちらの従者さんは王妃になれば贅沢三昧とおっしゃっていましたが、身の丈に合わない贅沢は人を堕落させるか破滅させるか……どの道ろくなことにならないんですよ。わたし、これでも来年からの就職先が決まっていましてですね。そこで数年働いて適齢期に結婚、もしくは、お局と呼ばれてもバリバリ男社会で働いて上を目指すか、っていう選択で迷っているところです。お局は独り身を貫く覚悟を固めなければいけませんが、まぁそこは社会に出て自分の実力を試してから見極めようと」

一人話をしていた小鞠はシモンたちが眉を寄せているのに気づいた。あれ、こっちの社会制度理解できなかったかな、やっぱり。コホンと軽く咳払いをして彼女はシモンへ目を向けた。

## 3

「つまり要点だけ申し上げますとですね。堅実安定とおさらばして異世界で知りもしないあなたのお后様なんてなりたくありません、ということです。おひきとりください」
「ふむ、コマリ姫のおっしゃることも最もだ。確かにわたしという人間を知ってもらうほうが先決か。ではコマリ姫、こういたしましょう。しばらくわたしをこちらにおいてください」
「はぁ、なんで！？」
つい地が出てしまったがもうかまってなどいられない。
どうして自分が得体の知れない、しかも異世界人の男を家におかなきゃならないの。

「コマリ姫はわたしを知らないとおっしゃったじゃないですか。では知っていただこうかと――それからわたしの后になるかどうかの判断をしていただきたい」
「だから異世界には行きたくないんだってば～。諦めて帰ってよ」
「やっと見つけた愛魂の対となる女性を諦めたくはありません」
「あなたの好みはないんですか。その愛魂ってのが選べばなんでもいいんですか？」

「外見や性格のことですか？愛魂が呼び合う相手とは相性がいいのです。そこは心配ありません。それにコマリ姫のお姿は可愛らしいですよ。そこまで見事な黒髪ははじめてみました。瞳も限りなく黒に近くてつぶらで。わたしたちとは違って少し黄色がかった肌の色も美しい。まるで真珠のようだ。きっとその肌や髪ならどんなドレスも映えるでしょうね」
うっとりと小鞠を見つめて言うシモンに、彼女は思わず自身を抱きしめるようにして身を引いた。

良かったいま秋で。
夏の薄着の季節だったらどんな目で見られてたんだろう。
小鞠の警戒心のこもった様子にシモンはにっこりと笑った。

「ご安心ください、コマリ姫。無理やりなどそんな男の風上にも置けないような真似はいたしません。あなたの気持ちがわたしに向くのを待ちます」
だーかーらー話を聞けぇ！、と小鞠は叫びたくなった。
気持ちもなにも異世界に帰ってくれと言ってるのに。
シモンが腰を浮かしてテーブルを回りこみ小鞠の座るソファの前に跪いた。
彼女の手を取りその甲にキスする仕草をとる。

「予感がします、コマリ姫。わたしはきっとあなたの虜となるでしょう。そしてわたしを知ったあなたもそうなることを願います」
微笑むシモンに小鞠は引きつった顔で手を振りほどいた。
（この人の笑顔って心臓に悪い）
どっくんどっくん脈うつ胸を押さえ小鞠は再度帰ってもらうよう言ってみた。
しかしまたしても却下されてしまった。

そこへピピピピピと携帯電話のアラームが鳴る。
バイトの時間だとアラームを止めた小鞠は、３人の目が携帯に釘付けになっていることに気づいた。
「コマリ姫、それは？」
「携帯電話。遠くの人と話ができる機械。わたしはこれからバイトなので出かけます。休日は稼ぎ時なんです。で、その間におとなしく異世界へ帰っていてください」
異世界から后にお迎えにあがりましたなんて冗談じゃない。

ビバ堅実、安定職業。
誰が異世界なんかに行くもんか。
カバンを手に玄関まで出て行く小鞠の後をシモンはじめ従者がぞろぞろとついてきたため、彼女は背後を振り返った。
おっと、背が高いなぁ。
キスするとき首が疲れそう。
一瞬、思ったことは頭の隅に押しやり小鞠はシモンを睨んだ。

「ついてこないで」
「外界は危険かもしれません。バイトとやらへ向かうコマリ姫をお守りせねば」
「いりません。夕方には帰ってきますからおとなしく待っていてください」
あ、違った。
言うべき言葉は帰れだった。
けれど小鞠が言い直すよりも早く、シモンは満面の笑顔になって彼女を腕に抱きしめる。
ぎゃあ、男の風上はどこへいったぁ。

「ここにいることを許してくださるのか。わかった。姫が望むのならここでおとなしくしていよう」
「「姫」ってやめてください。そんなガラじゃないんで」
「ではなんとお呼びすれば？」
「小鞠でいいです」
「コマリ」

ああもう、耳と尻尾が見える気がする。
ちくしょう、ちょっと可愛いじゃないか。
しかも22歳にもなって言うのもなんなんですが、男の人に抱きしめられるなんて初めての経験で、これは何というかすっごく照れる

んですけどぉ。
硬直していた小鞠は数秒後に我に返り、なんとかシモンの腕から逃れると彼の足元を指差した。
「靴、脱いでください。日本じゃ家の中は靴を脱ぐんです。土足で動き回って汚れたところは掃除しておいてください。それからわたしが留守の間勝手に部屋の外へ出ないこと。そんなおかしな服装でうろついたらおまわりさんに職質されますからね。あと、誰が来ても応答しない。いいですか？」
くどくどと念をおす小鞠にシモンは靴を脱ぎつつ頷いている。
他に注意点とか伝えておかなきゃいけないことはなんだっけ。
昔読んだライトノベルで逆トリップ物とかあったかな。
ともかく文化も何も違うはずだからそこは要注意か。
「用をたすならトイレはそこ。タンク横のレバーを手前に引けば水が流れます。おなかがすいたら冷蔵庫から勝手に好きなものを出して食べていてください。えーとそれから、なんだかよくわからないものだったから、という理由で家の物を破壊するのはなしです。しゃべる箱や音のでる箱は機械というんです。高いんです。壊してたら即、異世界に帰ってもらいますからっ！では、……いってきます」
出かけの挨拶にいい言葉が思いつかなくて「いってきます」と言うしかなかった。
「はい、コマリ。気をつけていっておいで」
にっこり笑顔のシモンの背後で従者二人も「いってらっしゃいませ」と軽く頭を下げる。
うわぁ、なんなのこれ。
なんだかこそばゆいぞ。

人が家にいるのは2年ぶり。
そしてこんな他愛ない挨拶も2年ぶりだ。

扉を閉めて鍵をかけた小鞠は喝を入れるようにバチンと頬を叩くと、
エレベーターに向かって駆けた。

## 4

バイト先は亡くなった父の友人が経営する喫茶店だ。
自転車で一駅分の距離。
そこでお客の去ったテーブルを拭きつつ小鞠は窓の外を見つめた。
そろそろ日が傾いている。
忙しく働いていた時は考える余裕もなかったが、客足が落ち着くと昼間の出来事は夢だったのではないかという気がしてきた。

（異世界から王子様だよ？わたしがお后って変でしょ。ガラじゃない。ないないない、ありえない）

ふるふる首を振っているとカウンター奥からマスターの声がした。
「小鞠、表のあれはなんだろうな？コスプレの外人さんが店をのぞいてるんだけど、小鞠英語できるか？」
ん、とガラスの扉を振り返った小鞠だが。
「ぎゃあシモンとその従者ぁ！」
「あら、小鞠ちゃんのお友達？だったら店に入ってもらったらどうなの？ちょうどお客さんも途切れたしコーヒーぐらいサービスするわよ」
マスターの奥様がニコニコと笑う。

「えー、知り合いって言うか押しかけって言うかぁ……てか、どうしてこの場所が。あっ、冠奈さん開けちゃだめ」
「もー、意地悪言わないの。小鞠ちゃんの大学の留学生じゃないの？優しくしなきゃ、メよ」
カラコロとドアベルが鳴って冠奈が扉を引き開けたとたん、シモンが店内に飛び込んでくると小鞠に抱きついた。
おい、だから男の風上とやらはどこへいったの。

「コマリ、帰りが遅いから心配で迎えに来た。約束を破ってすまない」
「あはは、夢じゃなぁい。現実だぁこれ」
もう笑うしかないと小鞠はかわいた笑い声を上げる。

「シモンさん？でいいのかしら。立っていないでカウンターに座ってちょうだいな。コーヒーでもお淹れするわ。えーと、シモンさんの従者さんも。菊雄さん、コーヒー三つ」
「はいよ」と返事をしないでください、マスター。
ねぇ、二人ともそこは突っ込もうよ。
シモンは誰とか従者ってなんでとか、その服はなんだよとかね。
「はじめまして。カンナ・アイダです。小鞠ちゃんのお母さん代わりよ。この人はわたしの夫の菊雄さん。小鞠ちゃんのお父さん代わり。キクオ・アイダ。オッケー？」

相手は流暢な日本語を話してるのに最後はオッケーか。
外国人に弱い日本人が出てます、冠奈さん。
小鞠はカウンターにつく3人を見た。
それにしてもそぐわない。
コスプレ外国人が冠奈さん趣味のメルヘン喫茶店にいるってすごく変な感じなんですが。

「わたしはシモン・エルヴァスティと申します。カッレラ王国第13――」
思わす小鞠はシモンの口を押さえてカウンター席から引き摺り下ろしていた。
店の入口まで引っぱっていって小声で言う。

「マスターと冠奈さんに異世界とか変なことを言わないで。あなたもテディもオロフも北欧の小さな島国から来た留学生。で、その服

は日本のアニメにハマってて今日はイベントに出てたって言うの。
いい？」

「嘘をつけと？キクオがマスターということはコマリの師だろうに。
しかもあの二人はあなたの親代わりなのでは？」

「マスターってそのマスターじゃなくてね。ああもう、いいから言
うとおりにして」

青い目を覗き込んで「いいわね」と念を押すと、シモンの頬がほん
のり赤くなった。
ちょっと待って、目がうっとりしてきてる気がする。

「ああ。コマリのいいように」

犬か、犬になるのかシモン。
なんだか命じたらそのとおりやってくれちゃいそうな気がするなぁ。
小鞠はブルルと首を振る。
いけない。
ちょっと自分の中に女王様が見えかけた。
そっちの趣味はないない、と額を押さえ彼女は「戻ろう」とカ
ウンターを指差す。

「内緒話はもう終わり？やぁねぇラブラブ？」

「冠奈さん、なんでも恋愛に話を持っていくのはやめてください」

「えぇ？だけどテディ君とオロフ君がシモン様と小鞠様はご結婚な
さる運命ですって言ってるけど。なんとか王国第１３代次期国王シ
モン様の王妃が小鞠ちゃんなんでしょう？」

ぎゃあ、ぬかった。
従者二人に口止めしてない。
っていうかおしゃべりめぇ。
じろりと小鞠が二人を睨みつけたが彼らはきょとんとしている。
うわぁん、こっちの常識が彼らには通じないー。
カウンターからコーヒーを三つ出しながら菊雄が楽しそうに笑った。

「異世界の13代王子様とかおもしろい設定だ。日本のアニメは外国でも人気らしいし、今はそういう話が流行ってるのか？」
「いえ、マスターキクオ。本当の話です」
シモンが首を振る。
黙れ、シモン。
コマリのいいようにと言った舌の根も乾かんうちに何を言いやがりますか。
思わず小鞠はシモンの頭をはたいていた。
テディとオロフがぎょっとしたがかまうもんか。
おおかた王子の頭をぶっ叩く人がいなかったってだけだろう。
びっくりしたような顔をしているシモンに、彼女は「黙って」と口パクで伝えたが、彼は首を傾げる。

「コマリ、何だ？声に出してくれないとわからないのだが――」

そこへ店の扉が開いてドアベルが鳴った。
そこで小鞠たちの会話は途切れる。
逆に店の入口から「キャァ」と黄色い声がした。

「いたぁ。この辺りで見失ったからどこに消えたかと――あのぉ、すみません。写真を撮らせてもらってもかまいませんか？あ、日本語通じない？えっとピクチャー……なんだっけ？」

年若い女の子が3人、シモンたちに近づく。
うわ、勇気あるな。
英語もできないのに外国人に話しかけるなんて。
だがそこで小鞠はハッとした。
シモンたちは服装をのぞいても目立つ顔立ちをしている。
この写真がもしどこかの雑誌社とかに送られたら困ったことになるのではないか。

（異世界人だから国籍不明だし……警察とか出てきたらヤバイぃ～）

小鞠はずずいと女の子たちの間に入って首を振った。
「すみません。この人たち宗教上の関係で写真は駄目だそうです。魂を抜かれるとかって信じてるらしくって、隠し撮りでも何でも写真を取られると国では切腹――あ、や、えと絞首刑にされるとかって、厳しい法があるらしいんです」

「えー？マジぃ、それなんか嘘っぽぉい」
「ていうかあなたに聞いてないし～」
「実はこの人たちに近づいてほしくないとか？」

やっぱり苦しい言い訳だったかと小鞠が困っていると、背後からにゅと手が伸びて次の瞬間、彼女はシモンの腕の中にいた。

「彼女の言うとおりです。我が国の法はとても厳しいのです。ですからシャシンはご勘弁ください。それからわたしと彼女の時間を邪魔しないでもらいたい」
ちゅ、とシモンが髪にキスしたのが小鞠にもわかった。
冠奈がきゃあと浮かれた声をあげ、菊雄がピクと眉を寄せる。
女の子たちは怯んだように顔を見合わせ店を出て行った。

見事に追っ払ってくれたよね、シモン。
でもえーと、さっさと離してもらえないだろうか。

「コマリ、いい匂いがするな。何の香水？」
「ただのシャンプーとリンスです。っていうか離して」
「もう少し――」
「シモン君とやら。これ以上小鞠にセクハラするならいますぐ店から叩き出すぞ？」
菊雄の声音が低い。
ヒイィ、マスター。
拭いてるカップを割りそうですってば。
シモンも菊雄の冷気を感じたらしい。
素早く小鞠から手を離した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8893z/

---

あなたの虜

2011年12月28日00時02分発行